

石塚遺跡調査概報 V

—平成10年度、主要地方道高岡環状線道路拡幅工事に伴う調査—

1999年3月

高岡市教育委員会

例 言

1. 本書は、主要地方道高岡環状線道路拡幅工事に伴う、石塚遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 当調査は、富山県高岡土木事務所の委託を受け、高岡市教育委員会文化財課が実施した。
3. 調査地区は、富山県高岡市上北島281である。
4. 発掘調査は平成10年8月25日から同年10月28日までである。
5. 調査関係者は次のとおりである。
文化財課長；宮村勝博
〔埋蔵文化財係〕
主幹兼係長；石浦正雄
係員；山口辰一、根津明義
荒井 隆、太田浩司
6. 当調査は、山口、荒井が担当し、長谷川一郎（山武考古学研究所）、岡田一広（富山大学学生）が補佐・協力した。
7. 本書における遺構記号は、次のとおりである。
S B - 捩立柱建物址、S D - 清、S K - 土坑、S X - その他の遺構
8. 現地調査及び報告書作成において、以下の各氏より御教示、御援助を得た。
西井龍儀、宮田進一、邑本順亮、山本正敏（順不同、敬称略）
9. 本書の執筆は、長谷川、岡田の草稿を山口、荒井が加除してまとめた。

目 次

例 言

目 次

I 序 説	1
II 遺 構	5
1. 挖立柱建物址	5
2. 上 坑	5
3. 溝	5
4. 四 地	6
III 遺 物	7
1. 上器類	7
2. 土製品	8
3. 石製品・石器	8
IV 結 語	9

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/5万)	1
第2図 調査地区位置図 (1/5,000)	2
第3図 全体図 (1/400)	3
第4図 遺構図 (1/200)	4
第5図 溝 S D56実測図 (1/80)	6

図面目次

- 図面1 遺物実測図 土器類
- 図面2 遺物実測図 土器類
- 図面3 遺物実測図 土器類
- 図面4 遺物実測図 上製品、石製品・石器

図版目次

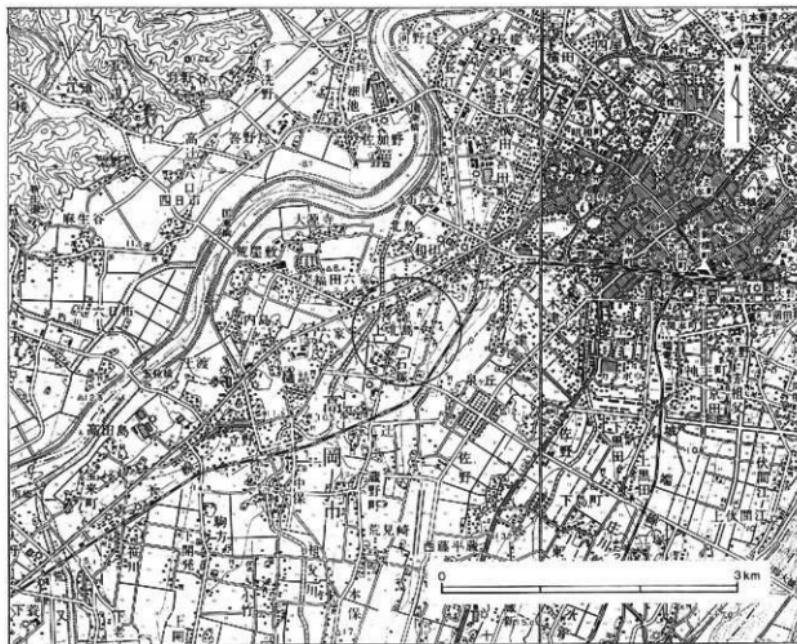
- 図版1 遺跡 1. 石塚遺跡遠景（東南東）
2. 石塚遺跡遠景（南東）
- 図版2 遺跡 1. 石塚遺跡遠景（南）
2. 石塚遺跡遠景（南西）
- 図版3 遺構 1. 調査地区遠景（南）
2. 調査地区全景（上方）
- 図版4 遺構 1. 調査地区全景（南）
2. 調査地区全景（北）
- 図版5 遺構 1. 調査地区南側近景（南）
2. 調査地区北側近景（北）
- 図版6 遺構 1. 溝S D56全景（南）
2. 溝S D56全景（北）
- 図版7 遺構 1. 溝S D56遺物出土状態（北）
2. ピット遺物出土状態（東）
- 図版8 遺構 1. 調査風景（北西）
2. 調査風景（南）
3. 調査風景（南）
- 図版9 遺物 1. 弥生土器
2. 弥生土器、須恵器
- 図版10 遺物 1. 珠洲
2. 珠洲
- 図版11 遺物 1. 越中瀬、越中丸山、信楽、瀬戸
2. 肥前
- 図版12 遺物 土製品、石製品・石器

I 序 説

遺跡概観

当「石塚遺跡」は、高岡市街地の南西郊、JR高岡駅の西南西側約3.0km、JR西高岡駅の北東側約1.8kmの地点に位置する。高岡駅と西高岡駅を北東～南西方向に結ぶJR北陸本線が当遺跡の東端部であり、JR北陸本線の東側には和田川が北流している。西端部には蛇行しながら北流する祖父川がある。これらに挟まれた標高11～12mの微高地に当遺跡は立地している。この付近は、往古の庄川が形成した扇状地の末端部に当たる。和田川、祖父川とも扇状地特有の湧水を水源とする河川である。

遺跡の範囲は、南北600m×東西470mを計り、当地域では最大規模の遺跡である。当遺跡では、縄文後期～晩期の遺物包含層が確認できる地点があり、その後、弥生時代中期・弥生時代末～古墳時代中期・奈良～平安時代・中世の遺構・遺物が確認されている。長期間に亘る複合遺跡・集落跡である。特に弥生時代中期の遺構・遺物は遺跡推定範囲の全域より確認されると共に内容的にも豊かである。県西部地域において初期農耕文化が初めて定着した集落遺跡であると共に中核的集落であったと評価し得よう。



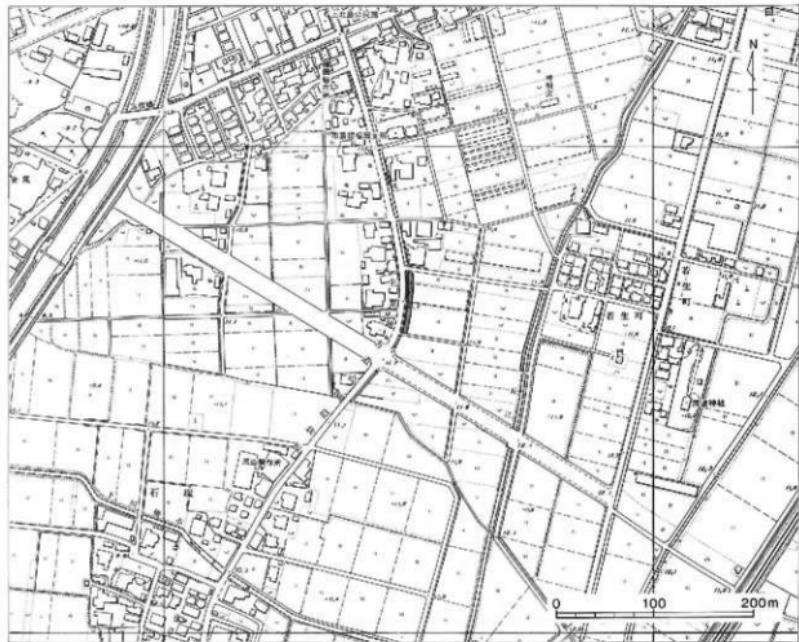
第1図 遺跡位置図 (1/5万)

調査に至る経緯

主要地方道高岡環状線は、JR高岡駅から3～4km離れた市街地周辺部を結んでいる県道である。高岡駅の西南西に位置する当石塚遺跡付近では、ほぼ南北に走っている。当遺跡の西側範囲はこの道路付近までと推定している。当遺跡の北西部に当たる上北島地内においてこの道路の拡幅工事が計画されたので、工事主体の県高岡土木事務所の依頼により、高岡市教育委員会が発掘調査を実施することに至った。当該地では道路の東側に用水が流れているが、これも含めて全体的に東側へ約4m拡幅する内容であった。当該地に南接する地区（石塚遺跡白石地区）で平成9年度に発掘調査を実施しており、遺構が検出されることは確実であったので直ちに本調査を実施することになった。国道8号線との上北島交差点から南南東方向へ走った当環状線は、当該地付近において右側へ曲がった後、都市計画道路下伏間江福田線と交差してさらに南南西方向に走るものである。当該地（調査地区）はこの北北東方向に位置する。手前には白石地区がある。調査地区は道路の拡幅部分、幅約4mで長さ約65mの範囲である。

調査経過

発掘調査は、平成10年8月25日から同年10月28日まで実施した。表土の除去はバックフォーで行い、当地区に隣接する水田に仮置きした。その後、遺構の掘り下げ、記録の作成を行った。調査地区的西側に接して



第2図 調査地区位置図 (1/5,000)

用水が流れしており増水の度に水が溜まり排水に手間取った。調査対象面積は257m²で、210m²の発掘を実施した。

検出遺構

掘立柱建物址 1 棟 (S B03)

土坑 3 基 (S K148~150)

溝 2 条 (S D55・56、溝の内 S D55は、平成9年度石塚遺跡白石地区にて確認した溝と同一のため、同じ番号を付けた。

凹地 1 基 (S X63)

出土遺物

出土遺物は以下のとおりである

土器類：弥生土器、土師器、須恵器、珠洲、青磁、近世陶磁器

上製品：土鍤

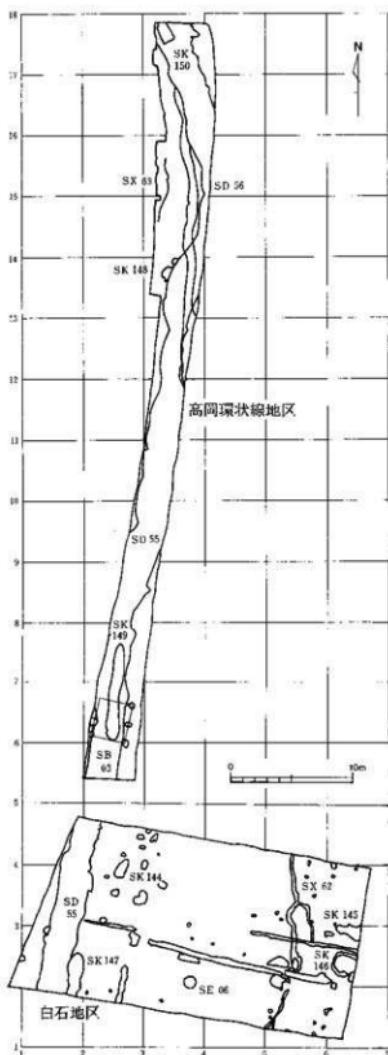
石製品・石器：砥石、石劍

なお、土師器、青磁は小破片のため図示できるものは出土していない。近世陶磁器は、越中瀬戸、越中丸山、信楽、瀬戸、肥前である。また近代陶磁器も出土している。

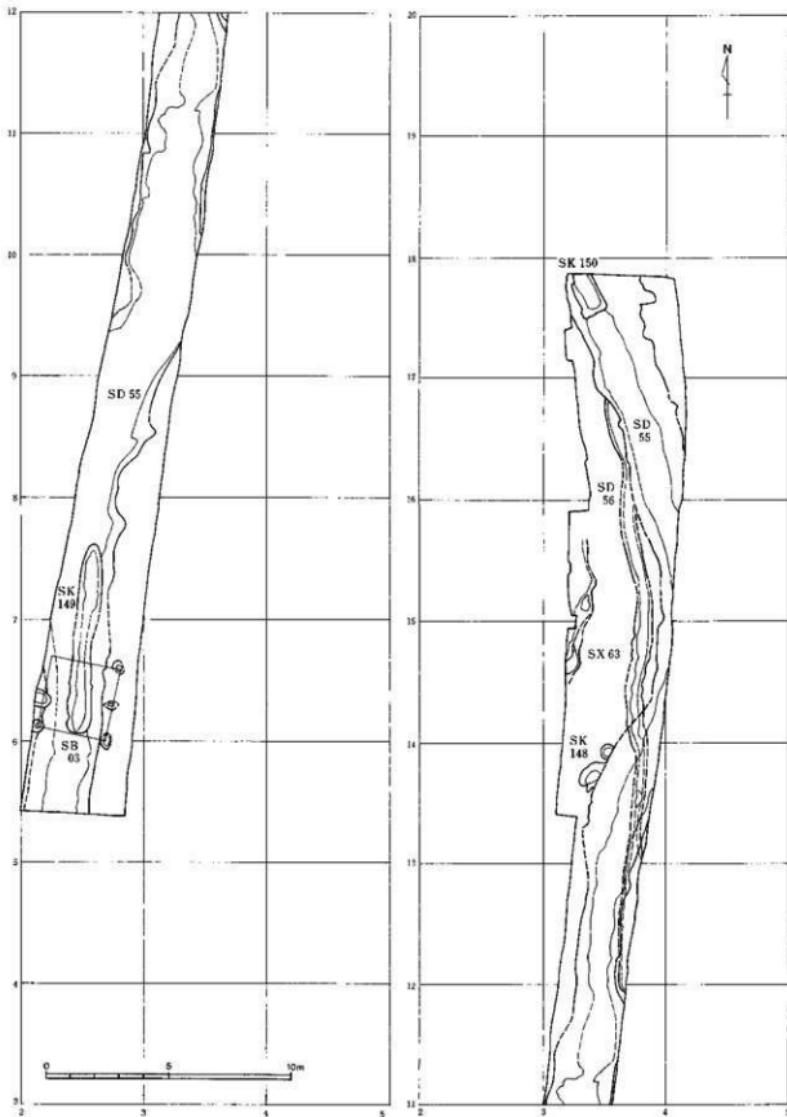
グリッド

調査地区的グリッドは平面直角座標系の第7座標系（原点は北緯36° 00' 00"、東経137° 10' 00"）にあわせた。X = 1、Y = 1の地点は、原点より西へ16.260km、北へ81.285kmの位置である。遺構図のメッシュは5m区画である。

グリッドの表示については、隣接する白石地区と統一したものにした。第3図として、当高岡環状線地区と白石地区とを合わせて示した。



第3図 全体図 (1/400)



第4図 造構図 (1/200)

II 遺構

1. 掘立柱建物址

掘立柱建物址 S B 03

調査地区的南側（2、5・6）区で検出された掘立柱建物址である。東側及び西側へ延びる可能性があり、検出した範囲で止まるものかどうかは不明である。検出した範囲内では、南北棟で棟の方向はN-10度-E、規模は桁行2間（3.00m）×梁行1間（2.80m）との解釈も可能である。S D55に南北に切られているので、梁行の中央の柱が削られた可能性がある。小規模な建物とした場合は検出した範囲内で収まるものとし、2間×2間ないし2間×1間の建物と言えよう。遺物は出土していない。

2. 土坑

土坑 S K148

調査地区的北側（3、13）区で検出された。平面形は円形で、規模は長軸1.30m、短軸0.90m、深さ20cmを計る。S D55に切られている。遺物は出土していない。

土坑 S K149

調査地区的南側（2、6・7）区で検出された。平面形は長楕円形で、規模は長軸7.80m、短軸0.90m、深さ30cmを計る。S D55に付属する遺構で、種もみを水に没すために振り込んだものである。

土坑 S K150

調査地区的北側（3、17）区で検出された。平面形は隅丸長方形で、規模は、長軸1.80m以上、短軸1.00m、深さ37cmを計る。北側は調査地区外となる。S D55に付属する遺構で、種もみを水に没すために振り込んだものである。

3. 溝

溝 S D55

調査地区の大半を覆っている。南北に走る溝であり、規模は幅1.80~2.60m、深さ20cmを計る。62.30mに亘り検出され、北側、南側とも調査地区外へ延びている。S B03、S K148、S D56を切っている。付属遺構として、S K149・150を持つ。平成9年度調査の「白石地区」で検出した溝S D55に繋がるものであり、総延長は80.20mを計る。そのため同じ遺構番号とした。出土遺物は、弥生土器、上師器、須恵器、珠洲、近世、近代陶磁器、土鍤、砥石、石劍である。図示した遺物は、図面1-1103・1110~1113、図面2-1114~1119・1122~1130、図面3-1131・1132・1134~1149・1151・1152、図面4-2101・3101~3105である。

溝 S D56

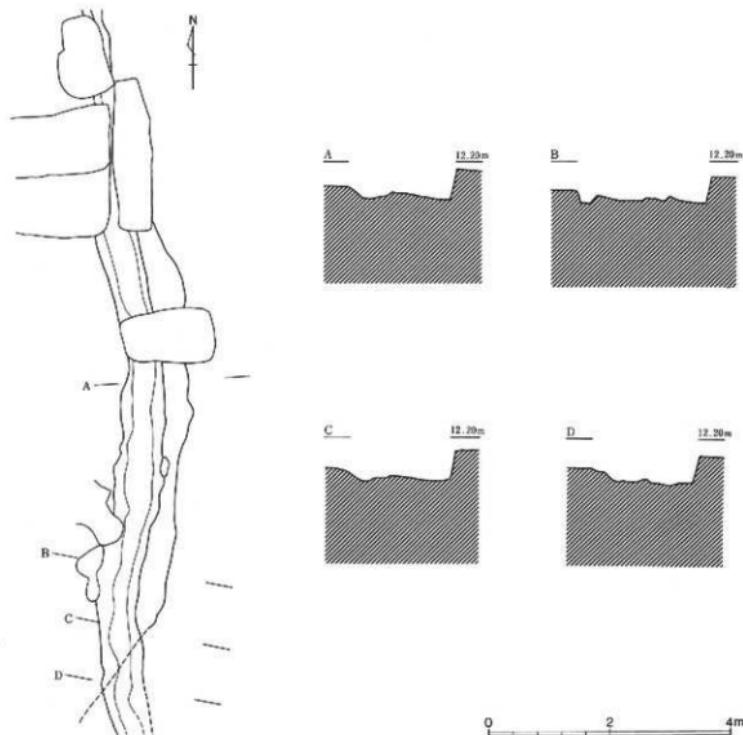
調査地区的北側で確認された。南北に走る溝であり、規模は長さ24.00m以上、幅0.60~0.70m、深さ15

~27cmを計る。S D55に切られている。出土遺物は弥生土器である。図示した遺物は、図面1-1102・1105・1108・1109である。

4. 凹地

凹地 S X63

調査地区北側(3, 14・15)区で検出された。平面形は不正形である。出土遺物は弥生土器である。図示した遺物は、図面1-1101・1104である。



第5図 溝S D56実測図 (1/80)

III 遺 物

1. 土器類

弥生土器

鉢：図面1-1101。外反気味に外上方へ拡がる口縁部は、やや内弯して終わっている。調整手法は内外面とも刷毛目を基調とし、口縁部では刷毛目調整後ナデを施す。

壺：図面1-1102～1104。1102・1103は壺口縁部である。1102は口縁部内面に櫛描列点文を施す。1103は口端部外面に櫛描列目文を施す。1104は丸い肩部から直立する壺の頭部である。

甕：図面1-1105～1110。1105は通有の大きさの甕で、口径は18.6cm、口縁部内面には櫛描列点文を施す。調整手法は内外面とも刷毛目を基調とし、口縁部外面においてナデである。1106・1107は小型の甕である。口縁部が外反して外上方へ拡がる。1106は口径15.0cm、口縁部内面に櫛描列点文を施す。調整手法は内外面とも刷毛目である。1107は口径15.8cm、口縁部内面に櫛描列点文、頭部外面には櫛描波状文を施す。調整手法は刷毛目である。1108～1110は甕の胴下底部である。1108の調整手法は、内面がナデ、外面が刷毛目である。1109の調整手法は、内面がナデ、外面がヘラ磨きである。1110の調整手法は、内面がナデ、外面がヘラ磨きである。

須恵器

図面1-1111～1113。1111・1112は高台の付かない杯の体・底部である。底部はヘラ切りである。1113は高台付杯の底部である。高台部の外下方へのふんばりは小さい。底部はヘラ切りである。

珠洲

擂鉢：図面2-1114～1117。1114・1115は、擂鉢の口縁部である。1114は、口端面はやや外傾し、オロシ目は密であり、オロシ目幅は2.6cm、条数は11条である。珠洲IV期に含まれるものである。1115は口端面が内傾する。珠洲V期に含まれるものである。1116・1117は擂鉢の底部である。1116はおろし目幅が2.2cm、条数は11条である。1117は、オロシ目幅が2.3cm、条数は18条である。いづれも珠洲IV期に含まれるものである。

鉢類：図面2-1118～1122。鉢類の底部と推測するものである。1118・1119の底部は回転糸切りの可能性がある。

壺・甕類：図面2-1123～1126。壺・甕類の底部である。1123の底部は、回転糸切りである。鉢類の底部となる可能性がある。1124の底部はヘラ切りである。1125・1126の底部には砂が付着している。

甕：図面2-1127～1130。甕の口縁部である。1128～1130は、破片が小さいため口径が把握できず断面のみ図示した。1127は珠洲II期に含まれるものである。1128は胴部上面にやや荒い平行叩き目を施す。1128～1130は、いづれも珠洲IV期に含まれるものである。

越中瀬戸

図面3-1131～1138。1131は焼で鉄釉を施す。18世紀のものである。1132・1133は皿口縁部である。1132は鉄釉を施す。1133は灰釉を施す。18世紀のものである。1134～1136は高台付き皿の底部である。1135は底部は無釉であるが一部灰釉を施す。高台は台形の削りだし高台である。18世紀のものである。1137は内面に鉄釉を施す。底部は糸切りのままである。1138は小杯で鉄釉を施す。

越中丸山

図面3-1139。鉢で、口径17.2cm、底径7.4cm、器高5.8cm、灰釉を施す。

信楽

図面3-1140。灯明皿で、底径4.6cm、内面に灰釉を施す。

瀬戸

図面3-1141～1143。1141は楕で乳白色釉に五曜文の染付を施す。19世紀のものである。1142・1143は内禿皿である。1142は灰白色の釉に唐草文様の染付を施す。1143は灰白色の釉に五曜文の染付を施す。19世紀のものである。

肥前

図面3-1144～1152。1144は肥前陶器の皿である。灰釉を施す。1145は肥前陶器の插鉢である。口径36.8cm、鉄釉を施す。19世紀のものである。1146は肥前磁器の皿である。口径14.0cm、底径6.8cm、器高3.4cm、乳白色釉に染付を施す。19世紀のものである。1147は肥前磁器の皿底部である。灰白色釉に染付を施す。18世紀後半～19世紀のものである。1148は肥前磁器の皿底部である。底径3.9cm、乳白色釉を施す。1149は陶胎染付の楕口縁部である。口径11.2cm、乳白色釉に褐色染付を施す。1150・1151は、陶胎染付の楕底部である。1150は底径5.0cm、青白色釉に染付を施す。1151は底径4.4cm、青灰色釉に染付を施す。いづれも17世紀後半～18世紀のものである。1152は京焼風楕である。口径11.3cm、底径3.9cm、器高4.8cm、灰釉を施す。

2. 土製品

土鍤

図面4-2101。須恵質で管状の土鍤である。長さ3.6cm、軸3.1cmである。中心孔は、直径1.2cmである。

3. 石製品・石器

砥石

図面4-3101～3104。3101は、溶結凝灰岩製で板状の形態である。一部のみの破片で全体的に使用されている。3102は砂岩製で板状の形態である。4つの側面が使用面で2つの端面が整形面である。一応完存品と思われる。3103は層状泥質凝灰岩製で板状の形態である。一部のみの破片で確認できる3つの側面と1つの端面すべてが使用面となっている。3104は珪質凝灰岩製で柱状の形態である。途中から欠損している。4つの側面がすべて使用面である。端面は一方が整形面で他方が欠損面である。

石剣

図面4-3105。鉄劍形の磨製石剣で灰褐色を呈する硬質砂岩製である。刃部が欠損しており茎部のみの残存である。残存長は中央で9.9cmを計る。茎部は最大幅3.4cm、最大厚1.0cmとなる。長方形状の茎部は、片方の棟の刃部付近が闊を形成するため外方へ拡がっていると理解できる。このため刃部と茎部との境に弱い後の闊を想定した。研磨は側縁付近を中心に部分的に未完成品とも考えられるが、一応粗雑な研磨を有する完成品として考えておきたい。

IV 結語

今回の調査地区は、当石塚遺跡の北西部で、平成9年度に調査し当調査地区に南接する「白石地区」と共に、この遺跡で最も北西方の調査地区である。

検出された遺構は、掘立柱建物址、土坑、溝、凹地である。

掘立柱建物址では、遺物を出土していないため時期が判明していないが、溝S D55に切られていることから近世以前に建築されたものである。

本調査地区の大部分にて検出された溝S D55は、近代の溝である。聞き込み調査によって、SK149・150がこの溝に付属する遺構であり、役割として穂もみを水に浸すためのものと判明している。

七坑SK148は、覆土の様相から、弥生時代と推測される。また、溝S D56と凹地SX63からは、弥生土器が出土しており、弥生時代のものである。平成9年度調査「白石地区」の報告書にて、弥生遺跡の北西端部になる可能性を指摘したが、当調査地区にて北へ延びる弥生時代の溝を確認したため、弥生遺跡の範囲はもう少し北へ拡張すると言える。

弥生土器は弥生時代中期のものである。石剣は溝S D55から出土している。縄文時代まで遡る可能性がある遺物であるが、弥生時代中期の土器が当調査地区から出土しているので、この時期のものと一応考えておきたい。

参考文献

- 小島俊彰他 1981 「新庄川遺跡出土の遺物」『大境』第7号 富山考古学会
平井 勝 1991 「弥生時代の石器」(考古学ライブラリー64) ニュー・サイエンス社
宮川 達也 1998 「越中瀬戸の成立と展開」『情報と物流の日本史-地域間交流の視点から-』 雄山閣
吉岡 康暢 1994 「中世須恵器の研究」 吉川弘文館
渡辺貞清他 1986 「福井県史資料編13考古」 福井県

報告書抄録

ふりがな	いしづかきらうさかほに						
書名	石塚遺跡調査概報V						
副書名	平成10年度、主要地方道高岡環状線道路拡幅工事に伴う調査						
巻次							
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査概報						
シリーズ番号	第43冊						
編著者名	荒井隆、岡田一広、長谷川一郎、山口辰一						
編集機関	高岡市教育委員会						
所在地	〒933-0057 富山県高岡市広小路7-50						
発行年月日	西暦 1999年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	所在地 市町村	コード 遺跡番号	北緯 度	東経 度	調査期間	調査面積	調査原因
石塚	富山県高岡市 上北島	016202 202158	36° 43' 52"	136° 59' 10"	980825 981028	210m ²	道路拡幅工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
石塚	集落跡	弥生時代	掘立柱建物址1棟 土坑3基 溝2条	弥生土器、珠洲、近世陶磁器 土鍬、砥石、石剣			

調査参加者名簿

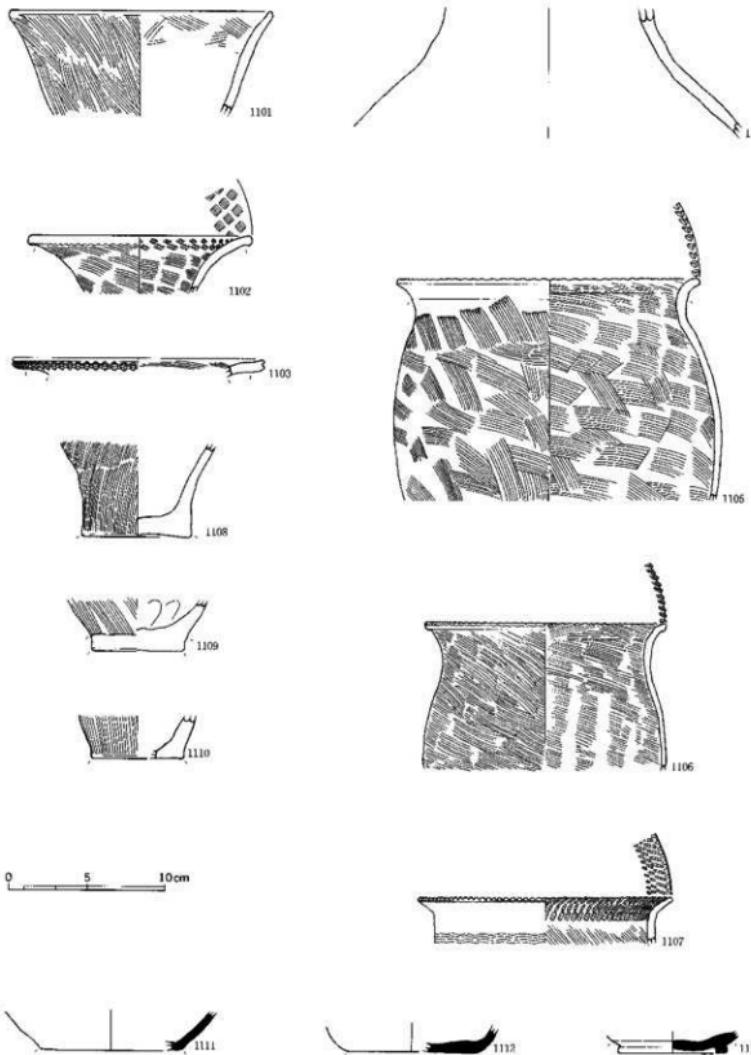
発掘

上田工、大川欣和、尾崎智道、尾崎裕計、小島善雄、小林央、佐賀一貴、新谷晴紀子、岡伊季子、田畠吉史
寺井久子、中島恒、仲谷巧正、南部昭一、八幡哲治、廣沢隆太郎、藤井美紀、古岡弘之、木江博美、前田武國
増山幸子、松本寛典、安田武雄、山城一夫、山出雅恵

整理

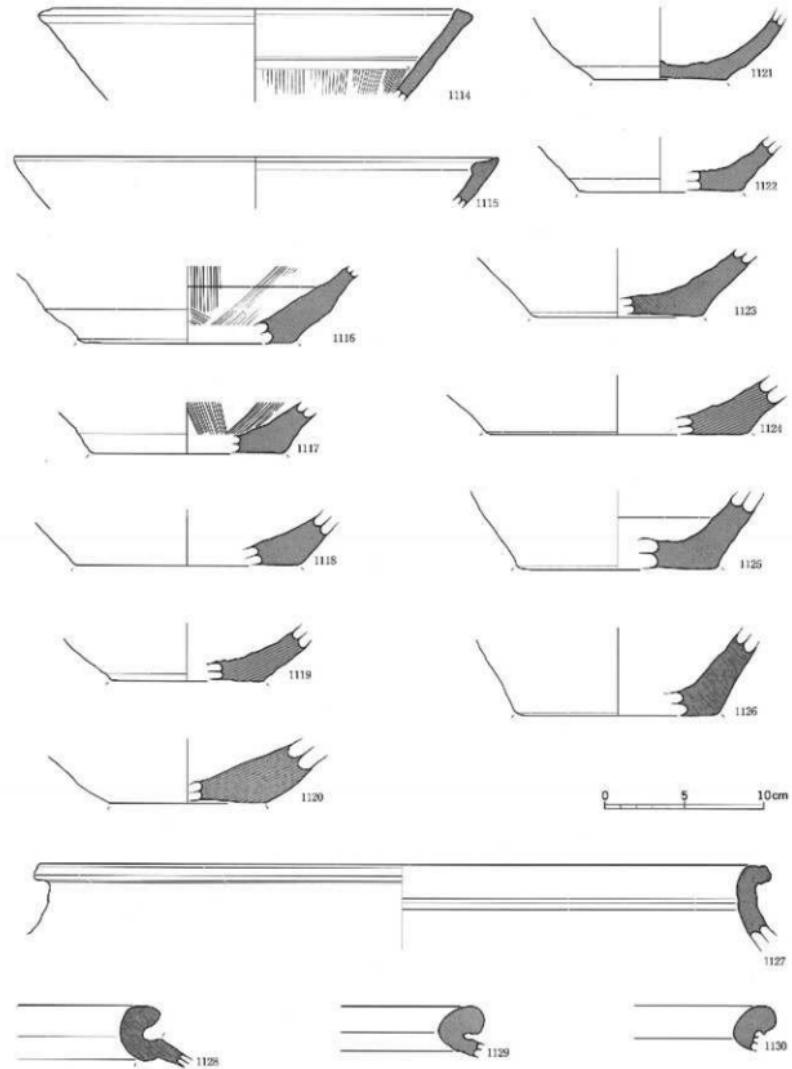
磯部夏子、大川欣和、小川紀子、折原美子、川田純子、小林央、新谷晴紀子、高木麻里、高田えみ子、寺井久子
道谷美奈子、長谷川清美、幡薫、水見智子、藤井美紀、放生千絵、堀田委月子、牧田里恵、三島幸代、明前雅江
村上みのり、山田忠

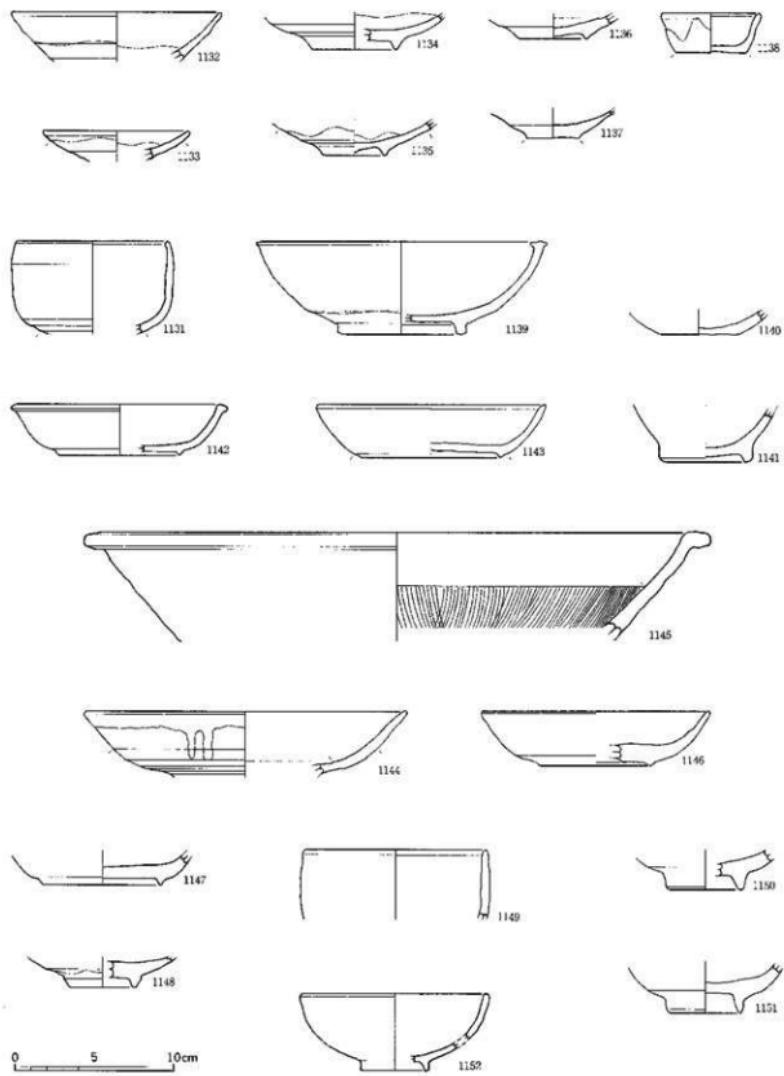
図面・図版



弥生土器：1101～1110、須恵器：1111～1113

縮尺1/3

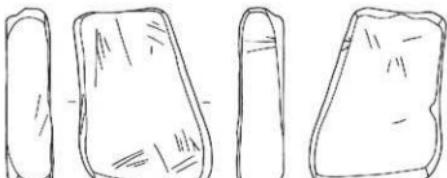
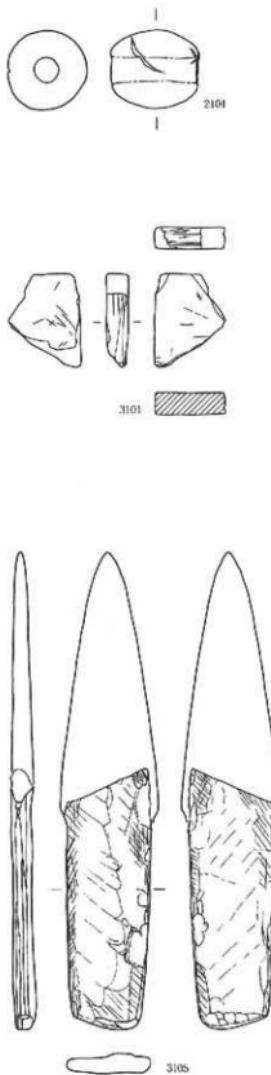




越中瀬戸：1131～1138、越中丸山：1139、信楽：1140、瀬戸：1141～1143、肥前：1144～1152

縮尺1/3

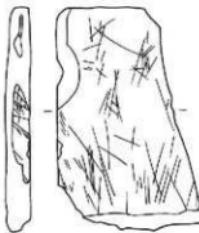
図面四 造物実測図



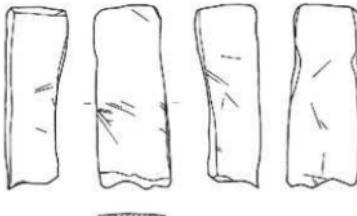
3102



3101



3103



3104



土鍤：2101、砥石：3101～3104、石劍：3105

縮尺1/2



1. 石塚遺跡遠景（東南東）



2. 石塚遺跡遠景（西南）



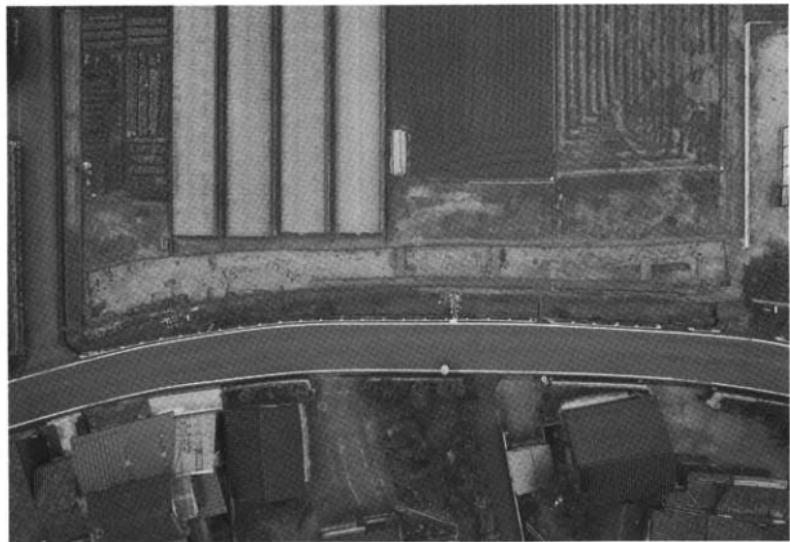
1. 石塚遺跡遠景（南）



2. 石塚遺跡遠景（南西）



1. 調査地区遠景（南）



2. 調査地区全景（上方）



1. 調査地区全景（南）



2. 調査地区全景（北）



1. 調査地区南側近景（南）



2. 調査地区北側近景（北）



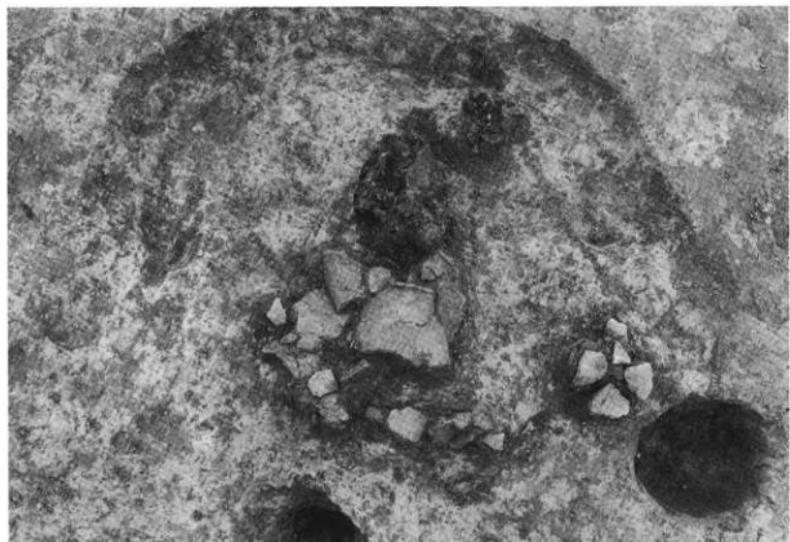
1. 溝 S D56全景（南）



2. 溝 S D56全景（北）



1. 濃 S D56遺物出土状態（北）



2. ピット遺物出土状態（東）



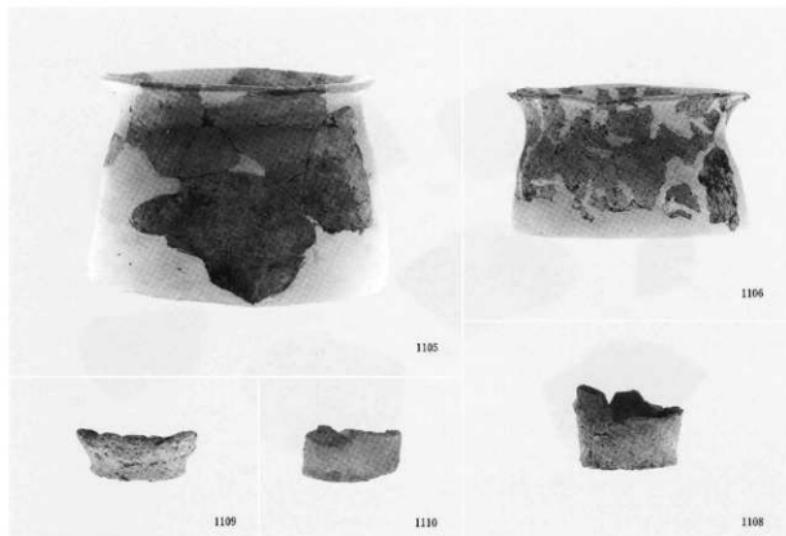
1. 調査風景（北西）



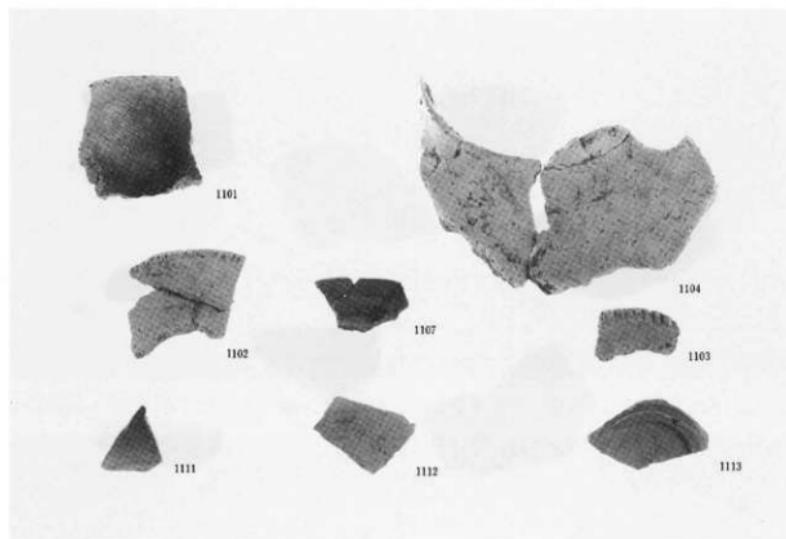
2. 調査風景（南）



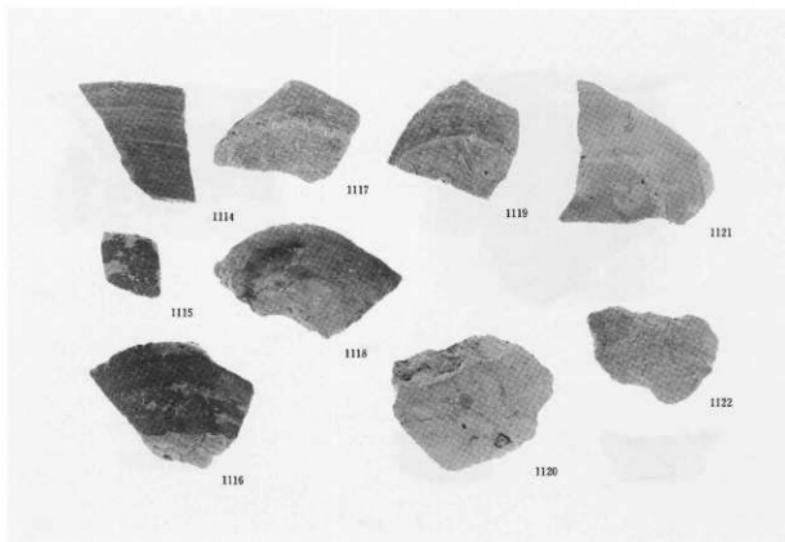
3. 調査風景（南）



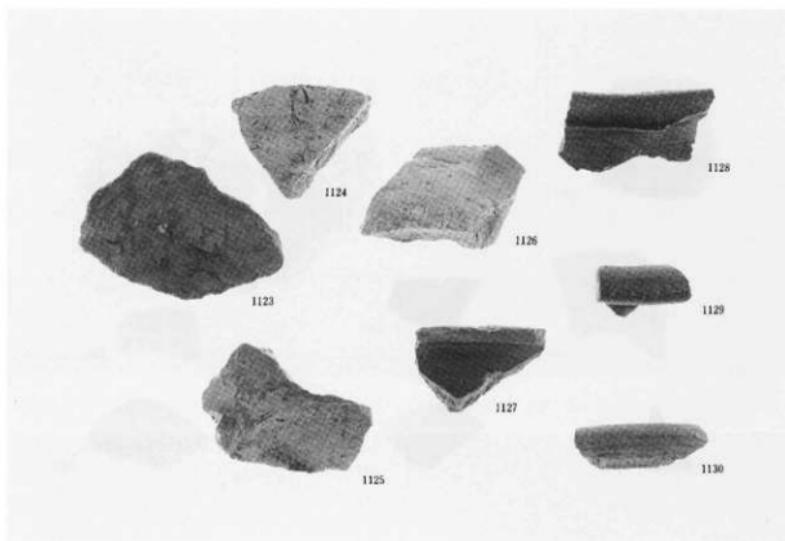
1. 弥生土器



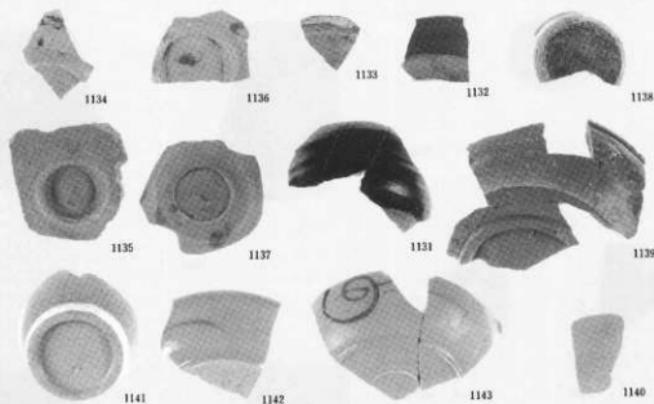
2. 弥生土器、須恵器



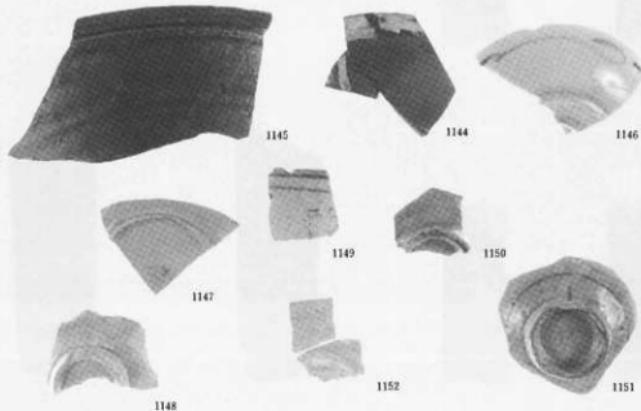
1. 珠



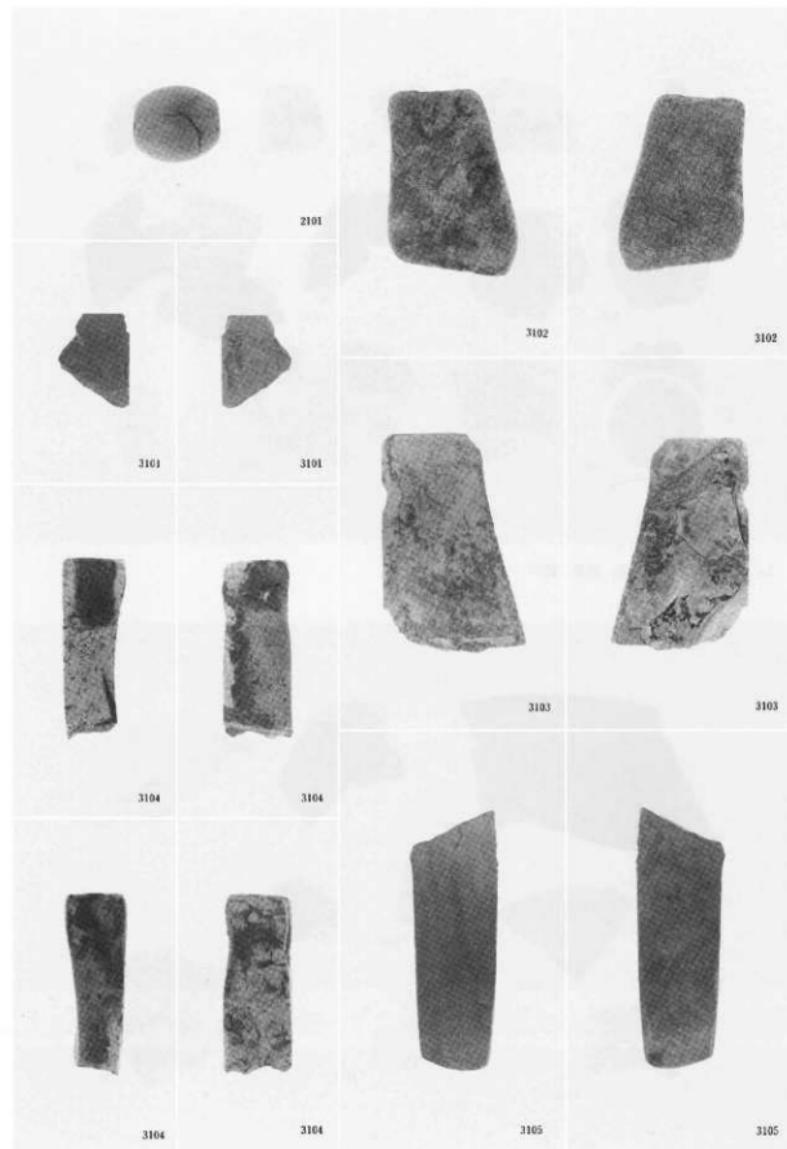
2. 珠



1. 越中瀬戸、越中丸山、信楽、瀬戸



2. 肥前



土製品、石製品・石器

高岡市埋蔵文化財調査概報第43冊

石塚遺跡調査概報V

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7番50号

1999年3月31日

印刷所 株式会社チューエツ高岡営業所

富山県高岡市木津458-1